

山口県におけるイネカメムシの生態と防除対策

山口県農林総合技術センター ほんだ よしゆき かむむら としかず みぞべ しんじ
本田 善之・河村 俊和・溝部 信二

はじめに

イネカメムシは、体長 13 mm 前後、黄褐色の楕円状で背部両側に黄白色の帯があるカメムシである（図-1 右）。日本では本州、四国、九州に分布する。成虫で越冬し、春～夏に出穂した水田に移動する。移動した成虫および幼虫は昼間には株元に潜み、夜間に穂に登って加害する。産卵は一回に 1 列または 2 列で 14 個の卵を葉表や葉裏に産むことが多い（図-1 左）。イネカメムシは開花期に穂の基部を吸汁して不稔籾を生じさせる。被害籾の口針鞘は酸性フクシンで染色すると簡単に判別できる（図-2 下）。加害された穂は充実せず直立し、無防除の圃場では収穫皆無となった事例も認められた。また、穂揃期以降に加害されると籾の基部が変色した斑点米を生じ（図-2 上）、等級格下げの原因となる。しかし、イネカメムシの生態や防除対策等については新たな知見が少ない。そこで山口県で発生するイネカメムシを対象に、発生地域や発生推移、卵巣の発達程度、防除対策等について、試験や調査を実施して考察した結果、いくつかの知見が得られたので報告する。なお、本試験は令和 2 年度 JA 全農農薬関係委託試験において実施された。

I 山口県におけるイネカメムシの発生状況

イネカメムシは、山口県ではクモヘリカメムシ、アカスジカスミカメ等とともに斑点米カメムシ類として知られていたが発生量は少なかった。イネカメムシの発生状況を把握するため、県内 4 箇所の予察灯（池田理化 60 W）における 2020 年の誘殺数を確認した。イネカメムシの誘殺数が多かったのは、山口市大内と岩国市玖珂の予察灯で、年間 200 頭以上誘殺されていた（図-3）。過去 13 年の県内 4 箇所の予察灯における合計誘殺数を見ると、2013 年ころから徐々に増加し、近年は誘殺数が急増していた（図-4）。月別誘殺数を見ると、4～6 月



図-1 イネカメムシ（左：卵塊と若令幼虫、右上：成虫、右下：老令幼虫）



図-2 イネカメムシによる被害（上：斑点米，下：不稔籾酸性フクシン（0.5%液）で染色された口針鞘）

Ecology and Control Measures of *Lagynotomus elongatus* in Yamaguchi Prefecture. By Yoshiyuki HONDA, Toshikazu KAWAMURA and Shinji MIZOBE

（キーワード：斑点米，不稔籾，イネカメムシ，蔵卵率，防除時期）